

津守真先生へ送る言葉

—「津守真先生を追悼し語らう会」から—

去る2019年3月21日、「津守真先生（平成30年12月10日ご逝去）を追悼し語らう会」がお茶の水女子大学において催された。100名近い教え子や共に研究した人たちが集まり、数人の方がマイクを通して先生に言葉を送った。ここでは、その中から3人の方のメッセージを掲載する（当日の進行順）。

大戸美也子氏（武蔵野大学名誉教授）はお茶の水女子大学家政学部児童学科において、発達心理学者から幼児教育研究者への移行期の津守先生を恩師とし、OMEP（世界幼児教育・保育機構）世界大会の日本開催で共に尽力された。

西原彰宏氏は、愛育養護学校における津守先生の同僚で、同校前校長である。

小川博久氏（東京学芸大学名誉教授）は、津守先生から引き継ぎ、日本保育学会会長を務められた（2003～09年）。



■大戸美也子先生のお話

はじめに

本日、お茶の水女子大学児童学科の第1回、第2回卒業生を含めて津守先生のご指導、ご薫陶を受けた方々が、このように大勢集ったのは、1983年3月、先生がお茶大を退官されたときの「最終講義」以来のことではないでしょうか？

さて、本日私は、津守先生がお茶大から愛育養護学校へと活動の場を移し教育・養護活動を展開する傍ら、OME P日本委員会の諸活動を通して、子ども理解の地平を広げられたことを皆さまにお伝えし、先生の追悼の言葉としたいと存じます。ここでは、三つのことをお伝えします。第一は、「なぜOME P日本委員会の仕事にかかわることになったのか」、第二に「実際そこでどのような仕事を達成されたのか」、そして第三に「OME Pの諸活動

が先生の保育活動や保育研究にどのような影響をもたらしたか」の三つです。

OME Pとのかかわり

津守先生のOME Pとのかかわりは、当時OME P日本委員会委員長であった荘司雅子先生（日本保育学会第3代会長）のご依頼で始まりしました。OME Pという組織と活動につきましても関係資料を参考にしていただくことにし、ここでは1983年当時のOME P日本委員会の状況に絞ってお話します。

OME Pは、就学前の子どもたちの教育に関する世界的組織で、第2次世界大戦終結後に結成されたユニセフに次いで、ユニセフ加盟国の有志によって1948年組織されました。主たる目的は、OME P初代世界総裁ミルダール女史の次の言葉に要約されています。「就学前の子どもたちの教育分野の知識を国際化することこそが、人類の平和となるのです

……私たちは持てる力を出し切って、世界中の子どもたちの健康と幸せのために尽くしましょう。今や、手を取り合うときです……」
(OMEPP日本委員会編『わが国の幼児教育・保育と国際交流』p8)

日本は20年遅れの1968年に、日本保育学会並びに幼稚園、保育園の八つの組織の代表で日本委員会を構成して加盟を果たし、その後は大小の国際会議の開催をはじめ、「日本の幼児教育」を紹介する英語版の図書の刊行など、目覚ましい活動を展開しました。

しかし、1980年代に入るとそれらの活動は下火となり、1982年に、15年間OMEPP日本委員会委員長を務めてこられた山下俊郎先生（日本保育学会第2代会長）逝去後は、世界大会に代表団を送ること以外の活動は停止状態になっていました。山下先生の後、会長に就任された莊司雅子先生は、学会の組

織改革を進める過程で、OMEPPと学会との在り方の見直しを始められ、その検討の責任者として、国際的な視野をもち、語学にも堪能な津守先生を、OMEPP日本委員会副委員長兼事務局長に抜てきされたのです。そして、1984年の秋頃から、莊司雅子委員長、岡田正章副委員長の協力のもと、津守先生はOMEPP日本委員会の組織改革の実質的なリーダーとしての活動を始めることになりました。委員会の構成員に国際活動に強い関心をもつ個人会員を加え、また、世界本部との連携を強めるなどして、日本委員会は新しい息吹が吹き込まれ、蘇生に成功したのでした。

OMEPP日本委員会での活躍

―世界大会の開催

津守真委員長時代の最大の功績は、アジア初のOMEPP世界大会の日本開催を実現したことです。しかし、この一大事業実施計画は、



先生が日本委員会の組織改革を実現後、いったん事務局長の任を降りた後に決まり、その実施上の責任が突如先生の肩にのしかかったといって差し支えないと思います。

1990～92年の期間、先生はドイツ・ホームステイ・プロジェクトを立ち上げ、その遂行に力を注ぎ、日本からドイツへ2回、ドイツから日本へ1回の交流を実現されました。他の加盟国の代表者からも「素晴らしいプログラム」と賞賛されうらやまれる、内容の濃いプログラムでした。

この企画遂行中に、当時の日本委員会委員長等から「日本での世界大会開催の提案」が出され、何度かの激しい議論の末、1992年1月の理事会で実施が決定され、委員長が世界大会準

備コーディネーターに選出されました。ところが、翌1993年3月に突然コーディネーターが体調を崩し、津守先生にその役割を渡されたのです！それからというもの、世界大会の開催（1995年8月）まで、昼夜間わず世界大会準備のために忙殺されることになったのです。後に先生が「私の人生の歴史の中で大きな文字で書くべき出来事」（『子ども学シンポジウム』2012年10月）と自ら語る事態が発生したわけです。「日本での世界大会開催は時期尚早！」と言い続けてきた先生、そして私も、いつしか世界大会の準備という大きなうねりにのみ込まれ、それは忙しい日々を送ることになってしまいました。

先生が第21回OMEP世界大会準備委員長に就任したのは、第20回世界大会（アリゾナ大会）のわずかに4か月前のことでした。この大会で次の大会のあらまし「テーマ」や主な企画、そして会場等の紹介をすることに

なっておりましてので、この4か月は先生を筆頭に事務局を担当した私たちも夢中で準備に当たることになりました。当時、日本委員会の個人会員は100名足らずでしたが、ほとんど全会員が役割を分担してアリゾナ大会に臨み、次回横浜大会のプレゼンテーションをなんとか無事終えることができました。

しかし、それから大会開催までの3年間は、大会開催準備金も大会運営のノウハウも無い中、先生を先頭に手探りの準備活動が続きました。まず最初の取り組みは、国際大会運営のノウハウを集めることでした。それで、毎年開かれるOMEP世界理事会に参加して、すでに世界大会を経験された加盟国の代表からより具体的な大会運営のノウハウを聞き出すことも懸命にしました。大変幸いなことに、津守先生は数少ない男性の代表であった上に、穏やかで誠実な態度は代々の世界総裁や各国代表からも認知されていましたので、「マコト

の世界大会を成功させよう」という暗黙の了解のもと、当時の世界総裁や理事たちはもとより多くの加盟国の代表からたくさんのご支援を受けることができました。特に、第19回



世界大会（1990年）を開催されたイギリス国内委員会のヒュイット大会事務局長には準備内容のリストを具体的に作っていただいたほか、当時の世界総裁ピノー女史は、OMEPの公用語である英語、仏語、スペイン語の3か国語の翻訳や印刷を引き受けることを申し出てくださり、大きな助けとなりました。こうして、「マコトの世界大会」は総裁、理事、そして各国代表がいろいろな形で参与して着々と準備を進めることができたのでした。ところが、概算でも1億円を要する大会準備

金に関してはなかなかめどが立たず、事務局としては大きな不安の中、準備を進める状況でした。

このような中、先生はいつも平常心を保って私たち事務局スタッフとのかかわりを続けてくださり、また「マコトの世界大会」の成功を願って、国内においてもいろいろな方々の労力や金銭的な支援を頂きました。この（追悼会の）会場に参集された方々からの支援も大変大きなものでありました。

財政難と国内外からの支援とのバランスをとりつつ、大会開催1年前には、各種企画の大枠を示す「大会プログラム（参加申込書付き）」を国内外のOMEF関係者や関係機関に発送することができました。そして、これから各種プログラムの具体的な準備に取り組むと、次の準備段階に入るその直前に、心配の財政問題の緩和につながるグッド・ニュースが飛び込んできたのです。ニューヨークの

ユニセフ本部から財政援助に資する申し出が届いたのです！ 日本で開かれる世界大会を、日本における「子どもの権利条約批准」を促す機会にしてほしいという願いのもと、このような思いがけない支援があつたのでした。早速、幼稚園・保育園の代表理事のご協力を得て、全国の幼稚園・保育園でのユニセフ募金活動を展開し、その一部を大会運営に充てることができました。会員の無償の労力支援、国内の幼児教育・保育関係の仕事にかかわる多くの方々や団体からのご寄付、全国の幼稚園児、保育園児らのご寄付まで頂いて、1億円を見積もった大会をなんとか赤字を出さずに準備することができました。本当に奇跡のようでした。

こうして、アジア初のOMEF世界大会は、1995年8月4日、44か国、1国際機関（ユニセフ）から1838人の参加をみて、成功裏に終了できたのでした。

OME P 活動を通して保育知の巨人となる

OME Pの活動は、本部との交信や毎年開催される世界理事会の出席に加え、国内での各種プロジェクトの展開とその成果を世界大会で報告する準備や広報の発行等々に多くの時間を割くため、自分の研究活動の時間をとることは難しくなります。まして世界大会開催の準備が加わると、企画・各種折衝・通信・財政確保の諸活動が昼夜区別無く続くことになり、この間の研究活動は、どうしても二の次にならざるを得ません。

ところが津守先生はこの超多忙な時期にも、愛育養護学校での教育・保育活動を続け、さらには自らの教育・保育活動に考察を加えた単著を4冊も著しておられたのです！ 後にこのことを知り、私は心底ビックリしました。特に、先生の代表作とも言える『保育者の地平』（ミネルヴァ書房）は、1983～95年

の時期の保育実践を素材に考察した結果を著しており、その背景に、OME Pの会議や関係者との対話の中で「保育者の地平」を着実に広げられていたことを知り、その休みの無い努力の積み重ねに感嘆しました。先生は、この期間だけでも16か国を訪れておられます。そして、各国を訪問の都度それぞれ個性のある保育実践に出会い、各国の「独自性」を知る一方で、各国の個性ある多様な保育実践に通底する「普遍性」、平和の重要性についても思考を深めておられました。ですから、私はこの本を読み進むうちに、先生は「保育知の巨人になられた！」との思いが自然にわき上がってきました。

そして、さらに思ったことは、「先生は保育知の巨人には違いないけれど、子どもは年々新たにこの地上にやって来るし、子どもが生まれると親も誕生すること」についてです。言い換えれば、「言葉を十分に使えず行為で自



分の気持ちを表す子どもは存在し続け、また同時に行為を読み取る力をもつ大人の必要もまたこれから先、何十年も何百年も続くこと」をも考えると、一人の「保育知の巨人」の登場だけで満足できないということです。

津守先生が「保育知の巨人」であることに
ついて、会場におられる皆さんも多分同感していただけると想像します。そして、大人たちが子どもの行動をよく見つけてメッセージを読み取る作業、読み取った見解を分かちあって子どもについての理解度を高める営みはこれからもずっと続けなければならないことについても、ご理解いただけるのではないかと思います。津守先生が開拓された子どもの世界の広がりや保育の森の深さは、今後さらに広がり深まりを続けても、狭まることは考えられません。ですから、今後私たちは、先生の開拓した世界に分け入って「子どもの世界」や「保育の領地」に新たな発見を求めて

耕し続ける作業をいろいろな形で進めなければならぬということですね。そういう意味で先生は私たちに実に大きな宿題を遺してくださったものと思います。先生には「私たちのいろいろな子ども理解、保育理解の試みを楽しみにしてください」と伝えたいものですが、皆さまのご協力が欠かせません。この会を契機に、協力していきましょう。

■西原彰宏先生のお話

愛育養護学校の西原でございます。

津守先生がお茶の水女子大学を辞められて、養護学校の校長になられたのが昭和58(1983)年ですが、先生ははるか以前から愛育会にかかわっ



ておられます。先日、平成10（1998）年の先生の草稿が出てきました。どこかで発表されているかと思つたのですが、どうも部分部分がいろいろなところに発表されていた元の草稿のようです。それによると、昭和20

年、先生が旧制高等学校を卒業して専攻を決める年の1月14日、20歳になったとき、教育心理学がご専門で東大の講師をしておられた岡部弥太郎先生を愛育研究所に訪ねておられます。つまり先生は、お茶大にかかわる前、一生の志を立てるときに愛育会と出会つたということです。そして、赤ちゃんの研究をしたいと思つた津守先生は、愛育研究所に無報酬で来ていたそうそうたる研究員の方たちや愛育病院のお医者さんに紹介してもらつて、その方たちと昼、テラスに出てランチを一緒に食べながらおしゃべりするのがとても楽しかったそうです。子どもについて、保育のことでだけでなく、医療の面から、社会的制度の

面からなどいろいろな視点から子どもの実態に触れて研究している研究者が皆、手弁当で集まっていたのが愛育会です。そこで教えるを受けて研究を始めているのです。

そして、学徒動員から生きて帰つて復学した後も、その頃東大には児童心理学の講座がなく、書物もなかったので、当時最新の1930年代の欧米の児童心理学の書物を読むために、愛育会にしばしばと通われたそうです。そこでゲゼルの研究と出会っています。ゲゼルについて、この人は本当に子どものことがわかつていると思つたと、これはご著書の中で書いておられます。遊んでいるときに子どもが見せる姿はこんな感じだと20歳の頃から感覚的にわかつていたということです。だからこそ、同じような感覚をもっている人が書いたものを面白いと思つたのでしょう。その草稿では「学問と子どもの実生活を結びつけた魅力的な書物」と書いておられます。



戦争から帰ってきて、発達に遅れのある子どもたちのための特別保育室を立ち上げるきっかけになったのは、そのようなお子さんから、発達検査をして、その結果を伝えた親御さんから、うちの子が遅れていることはよくわかっていて、そんなことを聞きに来たんじゃない、こういう子どもをどこで教育してくれるのか、それを聞かないと帰れないと言われたことです。翌日、当時の愛育会の教養部長の、お茶大から来ていた牛島義友先生に、この子らを教育する所をつくるべきだと話したら、

「じゃあ君がやりなさい」と言われて引き受けたのが、昭和24年、先生が25歳のときです。はじめは週2回、牛島先生が自分の教養部長室を開放し、そこを保育室にしてその子たち

の保育を行った。そして、それを一生続けた。その特別保育室から、後で愛育養護学校が枝分かれして生まれ、特別保育室も「家庭指導グループ」と名前を変えながら続いていきます。途中アメリカに留学した時期はありますが、津守先生はいったん引き受けた子どもの場所を、そこから必要とされる間、一生続けたのだということがわかります。

数年もたたない間に、特別保育室が満杯になりました。親御さんから養護学校をつくってほしいという要望が出てきました。愛育会のほうは、敷地が狭いので小学部までしかできないという限界がある。経営的にも困難がある。それでもやろうということになった。当時は、福祉と教育両方にまたがる学校として「養護学校」という概念こそできたけれど、小学部をもつ養護学校はほとんどなかった時代です。また、社会福祉法人が養護学校を設立する難しさもあり、認可されるまで困難を

極めました。当時の愛育会の新居善太郎理事長と、愛育研究所の森脇要氏と、当時29歳の津守先生が文部省と厚生省にタクシーで何度も足を運び、両省の担当者を説得してやっと愛育養護学校ができます。この認可申請のときの学校の設立趣意書を津守先生が書いておられます。つまり、津守先生がお茶の水女子大学から愛育養護学校に移られたのは昭和58年ですが、津守先生ご自身は昭和30年の設立時から愛育養護学校にかかわり、学校設立後の校長は愛育会の他の方がやり、ご自身は特別保育室を続けられた。そして学校のほうも、後年ご自分が引き受けることになったということです。

こうやって、いったん引き受けた子どものことに関してやり続けるというのは、愛育会の伝統ではないかと思えます。ちよつと宣伝めきますが、『あの日のオルガン』という映画が最近上映されたのはご存じでしょうか。あ

れは愛育会の話でして、映画に出てくる戸越保育所というのは、保育問題研究会の方たちがつくっていた保育所を、戦争の中で愛育会が引き受けたものです。昭和19年ぐらいに、きつと東京は空襲になるから、子どもたちを集団疎開させるべきであると愛育会に対して進言した保育所の畑谷主任に、当時保育所長だった森脇要氏が「じゃあ君がやりなさい」と言い、自分は責任者として奔走しました。主任はまだ20代です。その主任と20代の保育者7人が、50人以上の子どもたちを埼玉の蓮田市へ疎開させる。その後、東京大空襲があり、東京に残った親たちは何人か焼け死んでしまう。自分の家族や親戚にも死者が出る。それでも保母たちは子どもたちを保育し、最後の一人の迎えが来るまで疎開保育をした。地味な話なので、今まで何度か映画化しようとしてできなかったのですが、子どもの権利条約30年ということもよかったのでしょうか、

そういう映画ができたんです。それをやったのは、20代の保母さんたちで、必要だと考えるならあなたがやりなさいと言われるとそれを引き受けた。

これは単に言い出しつべがやるということではなく、「体を張る」という感覚の相互確認のような気がします。こういうことは愛育会の伝統のような感覚だったのではないか、そして、津守先生が若い頃、特別保育室を引き受けたのはそういう感覚だったのではないか。保育で考えてみると、交わるということにしても、出会うということにしても、体を張って子どもとかかわる保母さんたちがいて幼稚園の先生がいて保育が成り立つということ、これは津守先生にとって当たり前の感覚だったのだらうと思います。そういう保育は古今東西どこにもあるのではないのでしょうか。津守先生は一時コルチャックのことをよくお話しされていましたが、この人のことも、体

を張って子どもとかかわり、子どもに触れて子どもの本当の姿がわかつている、ということとで信じられたのではないかと、先生をしのびながら考えているところです。

■小川博久先生のお話

今日は部外者みたいな私が来てもいいのかなと思ったんですけれども、津守先生が亡くなられたときに葬儀に参加できなかったということがあつて、私なりに先生とのかかわりがあるので、出席させていただきました。

門外漢のようですけれど私、津守先生の後に保育学会の会長をやらせていただいた小川ですけど、先生との出会いというのが非常に衝撃的でした。

私は昭和34年に早稲田を出たのですが、ずっと4年間、ま、反省ですけれども、街頭で

運動をやとりました（笑）。それで4年の最後の警職法闘争のときに新橋で警官に追われて逃げ回ったということがあって（笑）。何も就職がないもんですから、仕方なしに大学院に行っただってという形で。ちょうど私の伯父、高杉一郎というんですが、戦前、梅根悟先生と学生時代に学校を退学になったアウトサイダーで、ずっと和光大学と一緒にやっていたのです。その梅根先生はコメニウスの研究者でもあり、梅根先生から学ぼうと筑波大学の方に行きました。コメニウスに非常に感動して教育学をやったんですが、この点は津守先生と共通しています。しかし、大学院では教育方法学に変わりました。

卒業後、北海道教育大学に奉職し、ちょうど4年たって東京学芸大学幼稚園科に移りまして、幼児教育学を自分の専門にすることになりました。私、非常に論争的な男でして、学生時代、論争することが意味があるという

ふうに思っていたものですから、その最初の保育学会に出たときに津守先生の発表に対していちやもんをつけたのは私なんです（笑）。それはどういうことかという、先生が、子どもというのは言葉では語れないというふうにおっしゃったときに、私が質問で、あなたは学会発表を言葉でやってるんだから言葉に尽くせないというのは無責任だ、みたいなこと言ったんです（笑）。これは明らかに揚げ足取りなんですけど。

その後、私、先生の『保育の体験と思索』を読ませていただいて非常に感動しまして。津守先生が現場に3年間通うっていうようなことで、私もそれから現場に通いだしました。結局いまだに通ってるんですけど、何十年も。



現場に行くということが私の使命になりました。それから一度どっかの会で津守先生との対談をやることになったときに、『保育の体験と思索』を徹底的に読んで行っただんですね。で、津守先生がおっしゃったことが、私の本をこんなに読んでくれた人はいなかったって。そのときに言われたわけです。

いずれにしても津守先生とのかかわりというのが非常に深くて。その後、津守先生がお茶大の研究をやられたときに、いろんな手法でもって、子どもの発見に至る前にいろんな研究を附属の先生方とやってるんです。で、調査をやったり。その過程を見て、実は私も学芸大で同じことを、いろんなあらゆる先生を使って附属の保育を全部記録するといった調査研究で先生と同じようなことをやってたわけで、気がついたら津守先生の後を追っかけておりました。

私が保育学会の会長になったときに、実は

今だから申し上げますけど保育学会ってのは大変にコンサバティブなところでございまして。昔あの、一橋の先生かなんかが司会をやられたときに、質問した方にですね、「おまえの質問はなつとらん」というようなことをおっしゃったことがあって、私はそれに異議申し立てをして、あらゆる質問に対して司会がそういうことを言うべきでないってことを言ったことがございました。そういう形で津守先生といわば内的な葛藤みたいなことでお付き合ひさせていただいて。学会の会長を引き受けたときに、私としては津守ラインで行こうというふうにならなくていいわけですが、周りの人たちがみんな、あの小川が津守ラインでやれるわけがないということですね。最初会長になったときに私に入った票が確か7票ぐらいだったんですね。最終的に仕方なしに私に落ち着いたわけですけど。

それから先生とご一緒にやっていく中で、



やはり津守先生っていう方は、子どもの心はどう理解するかということに自分の信念を置きながらも、あらゆる文部省とかいろんな政府の案に対して積極的

にわれわれこの学会で異議申し立てをしていこうということに実に前向きな方でございます。先ほど大戸先生の話聞きまして、自分の固い保育に対する信念をもちながらも、絶えずその時点で子どものために、周りのそういういった異議を、自分なりの意見を徹底的に前向きに開いていくって姿勢は、大戸先生がおっしゃったことと同じでございます。

大戸先生と僕は、学会ではとても仲良くはなかったんですけど（笑）。実は大げんかしたりなんかしたことがあるんですが、今は一緒に演奏会に行ったりしております。非常に昔

からとんがった存在でございましたので、私はいまだに、民主主義において論争することが大事だってことは信じております。ただ、津守先生が心を開いてくれたのは、ある学会があそここの事務局に来たときに、「小川君、日本つてのは村だよな」っていうことをしみじみおっしゃって、その日本の社会の中で自分の意見とか考え方を社会に向けていくことが、いかに葛藤があるかというようなことを表白されたことが、私は非常に胸に響いております。私も突っ張った人間でございますから、絶えず葛藤を抱えているわけですけども、そういう中で非常に津守先生に共感を覚えたことがありました。

そういうことがあったせいか、私が会長を辞めてから先生が何回か学会に訪ねてきたときに、すでに私が会長を辞めてるのに、小川君に会いたいって来るんですね。車いすで引かれて来たときにも、親族の方と一緒に私に



会いたいと来られて、私は大変感動しまして。やはり何か全く考え方が違うものをもちながらも、どこかで私とつながってくれていたという思いが強くありまして、私としては何としてもこの会で一言こういうことを皆さんにお伝えしたくて来たわけです。本当は来るべき存在でなかったかもしれませんが(どよめき)。

ただ、私はどちらかというと学生時代から自分の考え方を变えておりませんので、基本的にその、社会的な制度の中で幼児教育というものの位置付けについての考えてきておりますし、制度的な実践についてところに私の存在を置いているんですけれども、最終的に津守先生がおっしゃっている、子どもについていうものを、子どもの存在をどう擁護していくかということについては、到達点は方向性としては同じだと信じております。そういう意味で、津守先生とこの学会を通じてかわかったということは私にとって心の中の宝物

だと思っております。死ぬまでこの突っ張りを続けていくつもりなんです、そういう意味では今は大戸先生とも大変共感性をもっています。一緒にまた演奏会に行きましようと言ってるんですけども。

まあ、今の世の中っていうのはなんとなく表面的に仲良くしているようなふりをする世の中になっておりましてですね。胸襟を開いて大声で何か論じあうという状況がなくなっている。そういうことに時代の閉塞を感じておりますので、津守先生の、開かれた、あのしっかりした哲学の中で開かれた先生のオープンな周りに対する果敢なチャレンジ精神というものについて、今、皆さんがぜひ継承していただきたい、ということが一言申し上げたくて、今日ご挨拶をさせていただきますました。ありがとうございます。(拍手)

